

大阪商業大学学術情報リポジトリ

「社交」と「経済」の有機的連関—現代社会の問題性へのプラグマティズムからの接近—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2018-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河辺, 純, Kawabe, Jun メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/582

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「社交」と「経済」の有機的連関*

ー現代社会の問題性へのプラグマティズムからの接近ー

河 辺 純

1. 現代社会の課題とその真理

現代社会を象徴する表現に「グローバル社会」、「成熟社会」、「定常型社会」そして「成長なき社会」などがある。いつの時代も、「今・ここ」を表現する語には批判的（反省的）な意味が込められていることが少なくないように、現代社会を象徴するこれらの言葉には、どこか近代的価値からの転換が要請されているようにも感じられる。それは、世紀末から議論がなされて久しい問題――例えば貧困や格差、地球規模の環境問題および文化多元性の衰退など――が解決する兆しささえ見えず、より深刻化していくことに対するジレンマの現れともとれるのである。さらには、現代社会の課題とされてきた問題性自体への疑い、「本当にこれらは現代社会が解決すべき問題なのか」といった問いさえも浮上してこよう。

こうした問いは、現代社会のわれわれの思考を絶対的に支配している、経済的効率性優先の科学技術主義を脱する思考への転換可能性を探ることにほかならないとも言える。今問題視されている社会的課題は、自己利益に基づく「自由と平等」という自己中心的な考え（佐伯〔2015〕）から露呈した問題であり、その対応においても経済一元的理念の支配が強い。そこに、近代以前は一体となっていた、哲学的（真・善・美）価値が関わる余地は一切ない。政府や各企業が推進し、経営学研究でも昨今注目されている「働き方改革」なども、競争社会の限界を訴える倫理的議論にも映るが、経済的豊かさを凌ぐ社会的価値を見いだせていない現代においては、その有効性は疑わしいと認めざるを得ない。その始まりから、そうした価値に制約される歴史を辿ってきた経営学研究でも、現代の問題性の背景にある価値の問題を直視し、あらたな社会を構想するための基礎的思考様式が論究されなければならない。

そこで本稿では、こうした問題に接近する端緒として、近年各領域で関心が再燃するプラグマティズムの哲学を中心に考察し、この哲学的価値基盤から、組織の時代と呼ばれた20世紀社会が増幅させた「不安」の価値要因である「経済的有用性」の意味を再検討することを主題と

してみたい。具体的には、初期プラグマティズムの思想家である W.ジェームズの「真理」観を取り上げ、その特徴と近代的真理観との相違を明確することから始める。そこから、近代以降の能率的分業で確立された「功利的労働（経済性）」観と、経営実践の現場では「真面目に行われる仕事」の対極に位置付けられてきた「社交（遊び）」観に焦点をあて考察することにする¹⁾。

2．プラグマティズムの可能性－W．ジェームズの「真理」論－

2－1 プラグマティズムと現代

近年、プラグマティズムをテーマとする議論が、哲学の分野のみならず政治思想、教育思想、および経済経営思想を含め組織的实践との関連で盛んに行われているが、その背景には一体何があるのだろうか。われわれがプラグマティズムを要請する最大の要因は、その思想が、創始され発展し継承されてきたおよそ150年間の過程において、常に多元的で無限に開かれるよう導くからであろう²⁾。

一世紀半の歴史においてプラグマティズムという哲学運動は、衰退と再生の過程を歩んできた。プラグマティズムという用語の生成者である C.S.パース（Peirce, C.S.）この思想の発信者でありアメリカ国内だけでなく西洋や日本への普及に貢献した W.ジェームズ（James, W.）そして教育思想などへの応用者である J. デューイ（Dewey, J.）を中心とする19世紀末から20世紀初頭における古典的プラグマティストの時代からそれは始まった。その後、第二次大戦前後の論理実証主義などの台頭に伴う衰退期を経て、1950年代に再生させ20世紀にプラグマティズムを拡大させたのが、クワイン（Quine, W.V.O.）や R. ローティ（Rorty, R.）らのネオ・プラグマティストらであった。この時期、ローティによって非正統的哲学の地位に下げられた古典的プラグマティズムではあったが、近年再評価する動きが活発となっており、ニュー・プラグマティストと呼ばれる世代の哲学者たちが新たな主張を展開し始めている³⁾。

生成から普及、発展的应用、衰退と非哲学的転換、そして再生の途上にあるこの思想運動と、現代の人間組織そして社会から生成する多様な問題性との接近可能性を検討していくうえで、本稿が注目する研究に次のものがある。教育哲学の領域からプラグマティズムを研究している、齋藤直子の主張がそのひとつである。齋藤はニュー・プラグマティストらと呼ばれる哲学者達と同様、古典的プラグマティズムの「生活の哲学」という課題を共有したうえで、それ

らを現代の問題性と関わらせて再構築しようとする。

ここで注目したいのは、その再構築に際して齋藤が「際に立つプラグマティズム」という観点を導入していることである⁴⁾。「際に立つ」とは何を意味するのか、ここには三つの意味がある。ひとつにプラグマティズム自身が際に立つ思想であるということ、次にプラグマティズムの再構築においてこの哲学を際に立たせるということであり、最後にそのテキストを読むものが際に立って読むということが含意されている（齋藤〔2016〕55頁）。この三つの意味は、「プラグマティズムの問題解決的読解——プラグマティズムの理論を現実に応用して問題解決を導くというアプローチ——からプラグマティズムを解放すること」という主張を導くことになるのと言う（同上）。

プラグマティズムのこうした読解は、「役に立つ」実践の論理を求め続けてきた社会科学が、今まさに取るべき態度と重なるだろう。われわれは、「実用主義」や「道具主義」と称されるプラグマティズムの「有用性」を、確固たる普遍的理論基盤として現実社会を読み解く道具にし、実践現場に新たな手法を提示してくれる「有用性」として解釈してはならないのである。こうした継続的安定性を求めることができないところこそが、プラグマティズム最大の魅力であるという先の指摘は看過してはならない。そして、現代の問題性の根源を問い直すという本稿のテーマにおいて「真に有用」であると判断する思考そのものを、「際に立たせて」問い続けることの重要性にも気づかなければならない⁵⁾。際に立ち続けるプラグマティズムにとって、不可欠な思考は「あいまいさ」(obscurity)であり、「使える知識の意味を問い直す」ことだと齋藤は言う。すなわち、客観的科学的思考では測定不可能な現実を知る手がかりは、絶えず不安定でネガティブに語られるしかないような知の基盤にあるのであって、こうした基盤を構築することが現代社会科学の取るべき態度と理解できる⁶⁾。そうしたネガティブな語りのひとつとして、古典的プラグマティズムの再構築に専心するニュー・プラグマティズムの潮流があると考えたい。そこで、上記のような思考態度を読み解く手がかりとして、プラグマティズム創成期から追求されてきた「真理」観を検討しておくことにする。

2-2 W.ジェイムズの多元的真理論

「これなくしてはいつはてるとも知れないであろう形而上学上の論争を解決する一つの方法である」(James〔1907, 1957〕p.28, 38頁)とされるパースの生み出した「プラグマティズム」なる哲学に解釈を与え、アメリカ発の新しい哲学を広めたのはジェイムズである。彼が行なったのは、この哲学を広く展開するために多元的「真理」論によって、パースのプラグマ

ティズムの再構成を試みることであった⁷⁾。後に、ラッセル (Russell, B. A. W.) が経済中心主義であると揶揄したように、ジェイムズの哲学は多くの誤解と批判を受けることにもなる。しかし、ジェイムズの真理論の目的は、「事実と価値の混同や主観主義の科によって論難する人々の暗黙の自己理解に意義を申し立てた」ことであったと評されるように (伊藤〔2016〕79頁)、絶えず現実と理論の両者に――プラグマティズムそのものにも――揺さぶりをかけ続ける動態的で多面的な哲学として展開されることにあったのである。

では、ジェイムズにとって「真理」とは一体何だったのだろうか。科学的合理的な真理は、われわれの経験世界とは関わりを持たず、静的かつ実在せず、ただ適応し妥当させるものであると一般的には理解されている。このような閉じた真理観に対して、ジェイムズはプラグマティズムの真理観について次のように語っている。

ある観念が真であることは、その観念に内在する不動の特性ではない。真理は、ある観念に起こってくるのである。それは、真理になるのである。真理は、出来事によって、真理となるのである。真理の真理性とは、実際のところ、ひとつの出来事であり、ひとつの過程である、すなわち、真理が自己自身を真理となして行く過程であり、真理の真理化の過程である。真理の有効性とは、真理の有効化の過程なのである。

(James〔1907, 1909, 1957, 2014〕p.34, pp3-4, 48頁, 425頁)。

ジェイムズはプラグマティズムにおける真理は、経験の過程において「有効である」ことと密接に関わっていることを強調している。それは「真理化の過程そのもの」なのである。ともすると、このような真理観は、真理を客観的統一的な観点から主観的曖昧な理解に転換したようにも解釈されるかもしれない。ただしこれは、事物に先立って存在する「唯一絶対的な真理」を真っ向から否定するものではなく、「事物に先立って存在するしまた存在しない」(James〔1907, 1957〕p.106, 162頁)かもしれないような、真理化の過程に常にわれわれの関心を移行させるということに重きをおく思考なのである。したがって、真理とは完全なるものへの到達ではなく、過程であることが強調され、その到達過程とともに真理とは何かが語られていくのである。プラグマティックな真理は、「いかにして唯一と言えるのか」、「いかにしてそれは統一的なのか」と、観念が安定した着地点を見出そうとする直前で、絶えず予測不可能な過程へと揺り戻してくれるのである。

「社交」と「経済」の有機的連関

おしゃまなハンスがいとこのフリッツにいうことにや、
「フリッツ兄さん、なぜでしょう、
世界中での豊富者が (Dass grad' die Reichsten in der Welt)
一番お金を持つなんて ? (Das meiste Geld besitzen ?)」。

(James [1907, 1957] p.106, 161-162頁)

上はジェイムズがエルンスト・マッハ (Mach, E.W.J.W.) が何かで引用していた警句を、プラグマティックな真理観を語る際に引き合いに出してきた一節である。人が「^{かねもち}富者」 (英 rich man) であるということは、「豊かさ」 (独 Reichtum : , 英 wealth) という人間の生活過程を表す名称の本質的性質のうちの二次的なものに過ぎないはずであった⁸⁾。それがいつしか、「豊かさ」 (wealth) = 「豊富」 = 「富者」 (rich man) が真理として定着していく。こうした誤謬は、プラグマティズムそのものに絶えず付随してきたものであり、現代においても「有用性」を実務界での有用性へと疑いなく結びつけて思考することにも見受けられる。プラグマティズムが、技術者や医者や資本家といった人々に向けられたものとして理解されることを、ジェイムズ自身が反発するのも彼の真理観からすれば当然のことであったのである⁹⁾。

こうした事態を乗り越えて、「抽象的」であることと「具体的」であること、「一 (統一)」であることと「多 (多様、多元的)」であること、「客観的」であることと「主観的」であること、そして「理論的」であることと「実践的」であること、これらの観念を対置させたり、矛盾させることなく、有機的に連関していることを証明することがプラグマティックな真理化の過程であり、真理なのである。そして、こうした真理には「満足」 (satisfaction) が深く関わってくるというのがジェイムズの主張でもあった。

3. 「経済性」 VS. 「社交」の関係から「経済性」と「社交」の有機的連関

3-1 経営学の始まりにおける「経済性」と「社交」の関係

プラグマティズムの真理観の現代的意義を明確にする一つの課題として、ここでは「経済性 (功利的労働)」と「社交 (遊び)」に焦点をあてて考察する。経営学の生成と発展過程は、労働現場から「社交 (遊び)」を排除するか否かで、「仕事」の効率性を測ることができるのが主要な課題でもあった。したがって、20世紀においてこの両者を二項対立の構図で捉えること

は、疑いを差し挟む余地もない真理であった。そして、この課題を「科学」の問題として真っ先に取り組んだのが、F.W.テイラー（Taylor, F.W.）である。

テイラーの「科学的管理」（*Principles of Scientific Management*, 1911.）は、当時の実践現場に適応される過程で、管理者らによって都合良く解釈された「テイラー・システム」として定着することになる。結果としてこうした誤謬は、アメリカのみならずヨーロッパや日本の経営現場においても、効率的経営システムの有用性が証明されることにつながっていくことにもなった。

そもそも当時（19世紀末頃）の生産現場においては、のちに「組織的怠業」（systematic soldiering）と呼ばれる労働者間での生産制限が蔓延しており、これを克服する策として打ち出されたのがテイラーの「科学的管理法」である。テイラーが問題視したこの「組織的怠業」とは、個人の生理的欲求として現れてくる「怠ける」という現象とは区別されるもので、一定組織内で協働するメンバーを、暗黙のルールによって無意識的に強制するような、緩やかに互いを結合させる現象である。すなわちここで議論している「社交」に非常に近い現象と言える。20世紀初めの、功利的組織における能率的管理の現場では、こうした一種の社交現象が、効率を阻害する「無駄」として徹底した排除が目指された。しかしその後の景気変動も影響し、「人間は合理的経済性に動機付けられる」という「経済人」仮説への批判が顕著となり、別の思想運動が起って来たのである。有名なホーソン実験（1924年～1932年に実施）を経て、人間同士の非公式な繋がりである「社交」への配慮があってこそ、労働者の意欲を刺激し生産現場の能率が向上するという、「人間関係論」（Human Relations: 1930年代後半）という説がその代表的なものであった。

3-2 「経済性」と「社交」のあいだー山崎「社交論」から見てくるものー

「経済性（功利的労働）」と「社交（遊び）」を二項対立の構図で捉えるという思想的な立場は、多くの領域で「真理」として受容されてきた。また「働く＝真面目」に対して「遊ぶ＝不真面目」という構図から、社交を日常生活における余分な行動、すなわち「余暇」として、労働に対して二次的で付随的な位置付けへと退けることにもなった。こうした観念が近代以降に定着してきたことは、経営学のみならず関連する諸研究から推察することは可能である¹⁰⁾。

20世紀に定着したこの思考構造を再考察し、21世紀における「社交」の意義と可能性を提示した議論に、山崎正和の「社交論」がある。グローバル化が急速に進展する現代、予測不可能な不安とともに国家や企業といった強力な組織原理が衰退することで、そうしたものの繋が

りを解かれた個人が社会に浮遊し彷徨っている。こうした個人を救う一つの原理として、山崎は「社交」社会の復権を主張するのである。

そもそも「社交」とはどのような現象なのか、山崎は次のように述べている。社交とは、「なかば意識的ななかば無意識的に生み出され、第三者を排除しない抑制された感情によって結ばれ、その結果、人間が付かず離れずの中間的な距離に繋ぐ関係」である（山崎〔2006〕28頁）。この現象は、親しい仲間との関係性の空間にありながら、暗黙の規則には従わなければならないといったように、適度の緊張が保たれた公式的な空間と時間に支配されている。また、組織的労働のような拘束力からは解放されていながらも、礼儀作法が重んじられる雰囲気があり、完全に自由で解放されてはいない空間と時間に関係者は位置づけられていると言う。すなわち社交とは、二重にも三重にも矛盾した要求が満たされなければならない営みとして捉えられているのである。

山崎は、こうした独自の社交論を展開にするにあたって、様々な領域において先行してなされた社交に関連する研究を取り上げ、自らの社交論を再構築している。その中でも、G.ジンメル（Simmel, G.）の社交の哲学と、J.ホイジンガ（Huizinga, J.）の「遊び」についての研究に対する山崎の考察に着目することで、山崎の社交論の指向性のある程度は明確にすることができる¹¹⁾。

個人や社会を実体概念ではなく、相互作用という関係概念を根源に据えて捉えようとしたジンメルにとって、社交とは所与の達成すべき目的が先立ち成立しているものではなかった。それは、単に「協力すること」や「依存すること」や「対抗すること」といった人と人とが結びつくという現象それ自体、つまり結合する過程の充実そのものを目的とするものであった。したがって、一方が他方を手段化するといった関係性に陥ることのない主客未分の人間存在の根源を社交から見出したことを山崎は高く評価している。

他方、近代以降「社交」を禁欲的に遂行される「労働」の対極にある「遊び」の一種として軽視する傾向に、異論を唱えたのがホイジンガであった。ホイジンガは、「遊び」を労働力回復のための休息とみなしたり、仕事を学ぶための訓練として意義づけたり、生活に不必要な余剰エネルギーを発散するための手段（・・・のための）として理解する従来の考え方を否定している。むしろ、労働を含めて人間の文化的活動の先行形態として、遊戯を捉えるのである。山崎に拠れば、ホイジンガの遊戯には、「限定された時空のなかで行われる自由な行動であり、自発的に受け入れられた絶対的な規則に服従する営み」という特性があり、「その目的は行動の過程にある緊張と喜びそのものであり、その意味で『日常生活の外にある』という意識

に伴われることにある」とされる（山崎〔2006〕94頁）。そして、1938年という世界が功利と合理性の元に全ての価値を包摂しようとしていた時代に、あえて非合理的な遊戯の意義を重視したホイジンガの功績を評価している。

ただし、ジンメルとホイジンガの思想が、社交や遊戯をあまりに理想化し純粋化しすぎた点について山崎は疑問を呈している。まず、両者の思想では、組織における功利的活動すなわち人間の経済活動と、社交や遊び概念とは対極に位置づけられていることが問題であるとされる。さらには、この両極に含まれない日常生活における人間行動や遊びとも仕事とも峻別できない人間行動が、両者の理論からは捨象されていることがこうした問題の要因となっているとみているのである。

こうした「遊び」と「労働」の二項対立的で二者択一的構図から、両者を包摂する人間行動の原型として「社交」（人間関係）を捉え直すことから、山崎独自の社交論が展開されていく。そこで中心となる議論が、「労働と遊び」をより一般化して「経済と社交」という視点から、近代以降にはっきりとしてくる両者の対置的理解に、歴史的批判的考察を与えていくことであった。その過程で辿り着いたのが、人類学者 M. モース（Mauss, M.）の『贈与論』で論じられた、贈与と返礼の行為が社交の起源であったという主張である。その後、商業的交換を経て、近代経済活動が展開されてくるという過程を手がかりに、山崎は社交の論理を構築していく。贈与という人間の原始的情緒的な接触と、合理的な交渉活動とを、同じ地平で語ろうとするモースの主張の積極的評価を媒介にして（山崎〔2006〕181頁）、独自の論理で現代社交社会の在り方が展開されているがその中心となる考えは次のとおりである。

モースの「贈与と交換」の有機的繋がり主張に立脚しつつ、山崎は近代以降「経済性」と「社交」の歴史的過程で両者が決別していく過程を考察している。そして、この分裂の歴史において、経済活動が二つのある原理の複合であることを明らかにされるのである。この原理とは、一つは同質の社会に根ざし強化される「生産と分配の経済」という原理であり、他方が異質性の高い社会をつくりあげ、絶え間ない説得によって信用と権威が構築される「贈与と交換の経済」という原理である（山崎〔2006〕188～192頁）。この二つの原理が、時代とともに優位性を争いながら社会の在り方が決定づけられるのであるが、工業化社会はまさに前者が後者を征服していく過程であった。そして、成長が極限まで達せられ成熟化社会と称せられる現代は、この原理の優位性が転換し、「贈与と交換の経済」が「生産と分配の経済」を優越する兆しが現れ始めっていると断言するに至っている。

4．むすびにかえて―人間生活のプラグマティズムによる問い直し―

20世紀社会を支配してきた「生産と分配の経済」原理は、経済活動のみならず、科学技術や芸術文化、教育などあらゆる領域でのグローバルな斉一性を齎した。しかし、こうした原理の徹底は、予測不可能な結果を抱えることとなったのは周知であろう。したがって、グローバルな経済社会の進行は、同時にグローバルに予測不能なリスクを多面的に抱える社会を意味するようにもなったのである。国家や企業といった組織原理が個人を抑圧すればするほど、その先にそうした原理からの解放、つまり「贈与と交換の経済」原理の揺り戻しが起こってくると山崎は言う。すなわち、大量生産・大量消費を豊かさの象徴とした20世紀文明社会の進展が行き着く先は、忠誠心や義務感から一元的な組織原理によって結びつけられてきた個人が、そうした原理から解放され、多様な価値を積極的に求める社交社会が台頭してくると推察するのである。

こうした論理は、先に見たプラグマティズムの真理探求の過程とも類似するところが多くある。前者から後者への完全なる価値の転換ではなく、前者の価値を一旦「際に立たせ」たのちに、「何が真に有用なのか」という社会真理の過程を問い直そうとする。その意味で、山崎の社交社会の復権論は、ジェイズが主張したように唯一絶対の真理に到達する直前に、真理を予測不可能な問いの過程へと戻す哲学的思考と重なるところがある。すなわち、齋藤の表現に倣えば、山崎の社交論は現代社会の優先原理を絶えず「際に立たせ」て、自省的に問い続けている論理であるとも言えよう。

ただし、齋藤が再構成した「際に立つプラグマティズム」の最後の特性である、「テキストを読むものが際に立って読む」という観点はどうか。「新しい社交への要求は、将来、消費と生産の明確な区別さえ揺るがせる可能性を含んでいる」（山崎〔2006〕358頁）と言うように、「分配と生産の経済」原理と「贈与と交換の経済」原理そのものの意味を問い直し、そして語り直す過程で、社交論の有用性が明らかにされてこなければならいのではないか。こうした点に関しても議論が徹底された先に、新しい社交の復権が展望されると考えられるのである。

パースやジェイズらが創始したプラグマティズムは、19世紀に展開された超越主義（transcendentalism）の思想からも多大な影響を受けたとされる。その代表的思想家のひとり、H.D. ソロー（Thoreau, H.D.）は、マサチューセッツ州のウォールデン池の畔の森での自給自足生活を『森の生活 ウォールデン』（岩波文庫、1995年）に記録しているが、この中で

の記述はソロー自身が生活の真理を「際に立って」記述したものに他ならない¹²⁾。ソローは、文明社会から隔絶された森での生活の中で、真理を次のように思考した。

ひとびとは真理が、太陽系のはずれとか、いちばん遠い星のむこうといった、はるかかなたに存在するか、アダム以前なり、最後の人間のあとに存在すると考えている。永遠の時間には、確かに真実で崇高なものがある。けれども、そうした時間や場所や機会はすべて、いま、ここにあるのだ。…（中略）過去の詩人や芸術家がどれほど美しく気高い構想をいだいたにせよ、少なくとも、後世の人間がそれを完成させることができないということとはあり得ないのだ。

（H.D. ソロー『森の生活（上）ウォールデン』岩波文庫、1995年、174～175頁。）

真理は過去の権威的な偉人の思想の中にあるのでも、はるか未来や神聖な領域にあるのでもなく、現実世界に自ら身を置くことで得られるのだとされる。ビッグビジネスと呼ばれる鉄道事業や通信事業が生成してくる19世紀の只中、ソローは「現代の発明は、いつもわれわれの注意を大切な事柄から逸らしてしまうきれいなおもちゃだ」（ソロー〔1995〕、96頁）と皮肉を言い、こうした事業を支える技術の進歩を懸念している。ソローのこの著作は「経済」と題する節から始まっているが、それは文明社会の中で「制度」として定着した「経済」という観念の原始的な生活の中で問い直しとして映る。そして、制度化された「経済」生活がもたらす豊かさが幻想であって、こうした価値を考慮しない生活の「豊かさ」が自身の生活を通して語られていくのである。約170年後の現代を生きるわれわれは、果たしてこのテキストをどのように際に立って読むことができるだろうか。先に考察した、ジェイムズの真理化の過程に深く関わる「満足」を伴った経済的有用性を知る手がかりは、こうした思考とともにあるだろう。

そのためには、現代文明社会において確固たる地位を獲得した「経済」という観念について、その地位を解放し、「役に立つ」というその本質的意義を探究し続けなければならないだろう。それは、科学的真理によって測られるものではなく、それを支える「善」という倫理的価値と、それらを包摂する「美」によって基礎づけられていることを、古典的プラグマティズムの哲学からさらに考察することを要請するだろう。さらに、20世紀初めの哲学的経営学の思想からもこの問題性を論究していくことが今後の課題である。

＊本稿は、平成26年度および27年度に大阪商業大学アミューズメント産業研究所の研究助成を受けて行った、「近代日本におけるプラグマティズムの受容－遊びと学びの関係を中心に－」をテーマとする共同研究の成果の一部である。共同研究者の長妻三佐雄教授と宮坂朋幸准教授には、政治思想および教育思想分野から多大な示唆を賜ったことを感謝申し上げる。

〔注〕

- 1) 能率的分業の理念を提唱した代表的な思想に、F.W.テイラーのマネジメント思想があげられるだろう。テイラーは労働者の経験を優先する作業現場に蔓延する「組織的怠業」を克服するために、近代的時間観と科学的知識で再構成された仕事として「課業」を設定した。テイラーは、この「課業」と独自に考案した賃金システムの実践への採用によって、経済合理性の実現に貢献する「科学的管理法」の基盤を築いた実務家であり思想家であった。テイラーが組織から徹底して排除しようとした「組織的怠業」は、本稿で議論する「遊び」や「社交」と必ずしも一致するものではないが、テイラーの影響を受けたその後の近代組織の実践現場では組織目的（経済的合理性）と直結しない「遊び」の要素は排除されていく傾向にあったと考えられる。
- 2) 伊藤邦武は、「プラグマティズムはその当初の形成過程からして、少なくとも二つ以上の焦点をもった、複眼的で構造的な思想のダイナミックな運動」であり、だからといってそれがこの思想の曖昧さや脆弱さを示すものではないと述べている（伊藤邦武『プラグマティズム入門』2016年、筑摩書房、32～33頁）。
- 3) この世代を担う中心的哲学者の一人であるミサク（Misak, C.）は、ローティが軽視したパースの哲学概念を積極的に再評価し再構成しようと試みている（伊藤、同上書、第三章参照）。
- 4) 齋藤はこの「際に立つ」という発想を、スタンディッシュ（Standish, P.）がウィットゲンシュタインに依拠して提示した「言語の限界」という思想、ソロー（Thoreau, H.D.）の「つま先立ち」境界に立ち続けるという思想、そしてカベル（Cavell, S.）の日常言語哲学の言語観、この三人の思想からその着想を得たとしている（齋藤直子「際に立つプラグマティズム」『現代思想：特集いまなぜプラグマティズムか』青土社、2015年、7月号）。
- 5) 教育哲学者である齋藤自身、教育学の領域でも「実学重視の教育」などを提言する際にプラグマティズムの語彙を利用されることに対して、その背後に「産業界のニーズに対応した実践的・専門的な学び」のようなグローバル経済の原理が稼働していることに懸念を抱いている（同上、69頁）。
- 6) 本稿でとりあげる「ネガティブな語り」という表現は、社会哲学者今村仁司の思想に依拠している。今村は、資本主義社会に定着した「贈与－交換」という原理がある一方で、人間存在に本質的な満足を与える原理として、相手を特定しない無差別的な贈与である「純粹贈与」を見ている。この「純粹贈与」を支えているのが「語りえない」無限を語る「ネガティブな語り」である（今村仁司『社会性の哲学』岩波書店、2007年、第一部第一篇第三章参照）。齋藤の「際に立つ」思考と「ネガティブな語り」の志向性には類似するところが多いと考えられるが、これについての論究は今後の課題としたい。
- 7) 多元的なジェームズの真理論と、科学論および知識論として提示されたパースの真理観には相違があることは指摘されているところではあるが、本質的には両者は類似するものとして捉えられるとの見解が現状では一般的である（伊藤、2016）。
- 8) ジェームズは、富裕者の代表者として当時のアメリカの実業家であるロックフェラー（石油王）とカーネギー（鉄鋼王）の名をあげているのは興味深い。James, W., *Pragmatism*, Harvard University Press, 1907, pp.105-106.（梶田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫、1957年、162頁。）
- 9) 前述したラッセルの誤謬は、ジェームズが指摘したこの誤解と類似している。James, W., *The Meaning of Truth: A Sequel to Pragmatism*, Harvard University Press, 1909, p.101.（植木豊編訳『プラグマティズム古典集成 パース、ジェームズ、デューイ』作品社、2014年、439頁）。
- 10) その代表的なものにはM.ヴェーバー（Weber, M.）の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」があるが、ヴェーバーは、宗教倫理としての儉約・勤勉の精神が、近代的組織内労働で徹底される過程で、功利組織における能率へと導かれるという歴史的分析を行った。
- 11) 本稿では、近代以降定着した「仕事」と「遊び」の二項対立という思考構造に対する山崎の反論とグロー

バル社会における社交社会復権の構想にとりわけ着目して議論を行なっている。したがって、山崎の社交論を支える思想的基盤は本稿で扱った思想だけでなく、より多くの思想によって支えられていることには注意したい。

- 12) 宇野は超越主義の思想とは、「自己より深く掘り下げることによって、自然のなかに秘められた大いなる精神や、現在の彼方にある無限の未来へとつながっていく。このような信念こそが、トランセンデンタリズムを支えていた」と述べ、こうした思想がプラグマティズムやアメリカの民主主義の基盤となったと評価している（宇野重規『民主主義のつくり方』筑摩書房、2013年。）

〔参考文献〕

- James, W., *Pragmatism*, Harvard University Press, 1907.（榎田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫、1957年。）
- James, W., *The Will to Believe and Other Essays in Popular Philosophy*, Dover edition, 1956.（福鎌達夫訳『W・ジェイムズ著作集2 信ずる意志』日本教文社、1961年。）
- James, W., *The Meaning of Truth: A Sequel to Pragmatism*, Harvard University Press, 1909.（植木豊編訳『プラグマティズム古典集成 パース、ジェイムズ、デューイ』作品社、2014年参照。）
- Thoreau, H. D., *Walden, or Life in the Woods*, 1854.（飯田実訳『森の生活 ウォールデン』上下巻、岩波文庫、1995年。）
- 伊藤邦武「今日のプラグマティズムの一側面」『現代思想：特集いまなぜプラグマティズムか』青土社、2015年、7月号。
- 伊藤邦武『プラグマティズム入門』ちくま新書、2016年。
- 今村仁司『社会性の哲学』岩波書店、2007年。
- 宇野重規『民主主義のつくり方』筑摩書房、2013年。
- 河辺純「『経験としての協働』を考える」『桃山学院大学キリスト教論集』第50号、2015年。
- 斎藤直子「際に立つプラグマティズム」『現代思想：特集いまなぜプラグマティズムか』青土社、2015年、7月号。
- 佐伯啓思『20世紀とは何だったのか 西洋の没落とグローバリズム』PHP文庫、2015年。
- 村田晴夫「人間として世界に立つー『自由と愛』の精神に根ざして、『世界の市民』を養成するー」谷口照三・石川明人・伊藤潔志編著『自由と愛の精神ー桃山学院大学のチャレンジー』大学教育出版、2016年。
- 山崎正和『社交する人間ーホモ・ソシアビリス』中公文庫、2006年。
- ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』（高橋英夫訳、中公文庫、1973年）。